



カフェコーナーから見ることができるメインアリーナ。バスケットボールコート2面が取れる



屋上にある人工芝のテニスコート。中学のテニス部も使用する



クラブが常時利用できるスタジオ。メインアリーナに隣接する



利用者がくつろげるカフェコーナー。セルフサービスで運用



ソシオ成岩のフロント。9時～21時30分までスタッフが常駐する



小学生たちが勉強やスポーツを行う放課後スクール

身、成岩中の出身ですから、地域の一員として子どもたちを見守り、育てていきたいという思いがあるのです」と榎原氏。

平日は学校の部活動、土・日は地域の総合型クラブでというスタイルは、今にして思えば理想的とも思えるが、導入当時はさまざまな課題にぶつかることがあつたと言う。

「クラブに入つてもらうために、部活と異なり会費をいただくことについて理解を得ることが難しかったです。また、学校側と施設利用に際してのクラブとの調整や、クラブの指導者として関わる教員、関わらぬ教員の間での軋轢(あきれき)が校内で生じたことがあります」

じたこともあつたようです」

結論を言つてしまえば、この先進的な取り組みは2013年に学校側の土・日の部活動再開によって「一旦後退すること」となつた。現在は部活以外の活動を幅広く行う形で、部活動と併存しながら、共同利用施設を拠点として総合型クラブを運営している。

**日常的に学校の中に地域の大人が存在する**

現在ソシオ成岩のチーフマネージャーを務める富田綱氏は、「平日は学校が下校時間まで授業や部活動で使用し、その後、クラブが地域に広く活動を提供しています。休日は2面あるネーボーを務める富田綱氏は、学校側との調整や、クラブの指導者として関わる教員、関わらぬ教員の間での軋轢(あきれき)が校内で生じたことがあります」

「健康体操の教室に参加しているおばあちゃんなど中学校に通うお孫さんがすれ違つたり、テニスコートを使用している方が、クラブハウスで休みながら子どものことです。成岩中の生徒たちの会員も多いですから放課後にはクラブハウスで仲間と宿題をしたり、小学生たちと遊んだりしていることもあります」と続ける。

「いつでも中学校の部活動を受け入れる体制は整っている

して顕在化したのはここ1、2年のことです。それまではわれ

われのような取組はとてもレアなケースでした。前述した当初は、校長も教員も毎年のように入れ替わります。そうしたなかでクラブの存在意義や目的への理解が薄まつてしまい、他の中

学との違いばかりが目立つてしまつたのだと思います。当時の校長としても「周りと同じ」にすれば無難だと判断したのでしょうか」と振り返る。

「現在クラブ会員は2927名。過去最高です。安定して自

主運営が行えています。クラブの活動、運営としては、部活動から切り離されてむしろわかりやすくなっています」と榎原氏。「一方で、中学校の校長としてはとても頼りになると、ソシオ成岩のようなくらい立場では『昨今の社会情勢のなかで、ソシオ成岩のようなくラブが同じ地域にあるのは、学校としてははとても頼りになると、思います』と社会の変化を実感している。だからこそ『ソシオ成岩としても、再び『学校の部活動のサポートをしてほしい』とい

つ言わなくても対応できる体制は整っています。設立から23年が経ち、やつと意義が果たせる時代がきたように感じます」と、

「中学生の部活動をどうするか、といった議論ばかりが目立つますが、部活動に限らず、この年代の子どもたちにとって、何

を経験させ、何を学べることがいいのかといった視野が必要です。子どもたちに多様な経験を与えられる環境とはどういったものかを考え、いつほしいと思つています」と榎原氏は自身の経験を踏まえて訴える。

元プロ選手が指導する人気のバスケットボール教室。「部活動、学校行事を優先しながら、クラブに参加するように伝えています」とルンゲ春香コーチ(中央)

「もともとあった地域の『少年を守る会』といった組織がソシオ成岩の推進母体でした。私は

その後2002年に特定非営利活動法人(NPO)に認証され、「ソシオ成岩スポーツクラブ(以下、ソシオ成岩)」と名称を改め、翌'03年には半田市による成岩地区総合型地域スポーツクラブハウス「NARAWA WING」の

成モード事業」の指定を同9月に受けおり、「総合型クラブの草分け」として知られるゆえんである。

中央部に位置し、人口は約12万人で、近年大きな変動はなく推移している。市内に5つある中学校区の一つ、成岩地区に、総合型地域スポーツクラブ(以下、総合型クラブ)として「成岩スポーツクラブ」が発足されたのは1996年3月のこと。95年に文部省(当時)が打ち出した「総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業」の指定を同9月に受け、ソシオ成岩の「ソシオ成岩スポーツクラブ」が発足されたのである。

**全国に先駆けて創設された総合型クラブ**

連載(第6回)

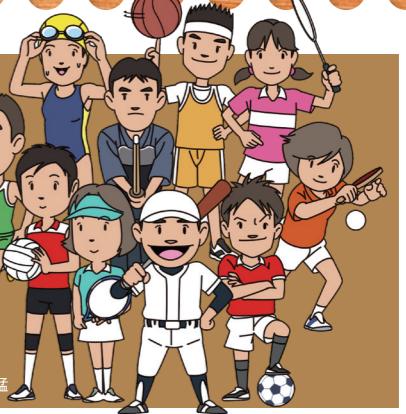
## 中学校の体育施設を共有のクラブハウスとして活用

半田市立成岩中学校×ソシオ成岩スポーツクラブ

# 変わる学校スポーツ

少子化が進み、子どもたちを取り巻くスポーツ環境が変化してきている。スポーツ庁からも「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」が発表され、改革が動き出している。学校におけるスポーツの在り方が、持続可能で、より現状にマッチしたものとなるにはどのような形がいいのか。今回は中学校の体育館施設を管理する総合型クラブとして「ソシオ成岩スポーツクラブ」(愛知県)の実例を紹介する。

イラスト／庄司猛



ソシオ成岩スポーツクラブの榎原孝彦マネージングディレクター(左)、富田綱チーフマネージャー

ソシオ成岩スポーツクラブのクラブハウス。右側に位置するのが成岩中学校



特定非営利活動法人ソシオ成岩スポーツクラブ  
(HP) <http://www.narawa-sportsclub.gr.jp/socio/>

現在の運動部活動問題を見越したような、先駆的なモデルとなつた。地域で子どもたちを育てるという思いから、中学校と連携する議論は、1990年代からありました。学校に週休二日制が導入される際に、週末の子どもたちの活動は、家族、地域に戻していくのがいいだろうと。そのため受け皿が『総合型クラブ』だったのです」と話すのはソシオ成岩のマネージングディレクターである榎原孝彦氏。ソシオ成岩の立ち上げ時は成岩中の教員として、クラブハウス運用の段階では半田市教育委員会の立場で尽力してきた。成岩中の教員として、クラブハウスの生みの親とも言える存在であり、現在は隣接する町の成岩の推進母体でした。私は中学校の校長を務めている。

「健康体操の教室に参加しているおばあちゃんと中学校に通うお孫さんがすれ違つたり、テニスコートを使用している方が、クラブハウスで休みながら子どものことです。成岩中の生徒たちの会員が多いですから放課後にはクラブハウスで仲間と一緒に宿題をしたり、小学生たちと一緒に遊びながら子どもたちの会員が多く見られるなか、部活動のサポートを後退させざるを得なかつた事情はどういつたところにあるのか。教職員の働き方改革だとか、ブラック部活動など耳目を集め、社会問題となり方として、大いに参考になるものだろう。